編集委員会から

学術著作権協会主催シンポジウム参加報告

2026年3月4日，赤坂インターシティAIRで開催された，学術著作権協会主催シンポジウム「オープンアクセス・オープンサイエンス時代の著作権を考える」に参加してきました．近年，学術出版を取り巻く環境は大きく変化しており，オープンアクセス（OA）の普及に加え，生成AIによる論文データ利用など，新たな課題も議論されるようになっています．本シンポジウムでは，日本および海外におけるオープンアクセスの現状や，学協会における著作権管理のあり方について，さまざまな立場から講演と討論が行われました．

シンポジウムでの話題で特に印象的だったのは，学術出版を「研究者・出版社・図書館・研究助成などを含む学術コミュニケーション全体のエコシステム」として捉える視点でした．それぞれの時代で，社会情勢や出版・通信技術に応じたエコシステムが形成されており，技術の進歩がエコシステムの形を変えるという議論がなされました．現在では，単に論文を公開するかどうかだけではなく，研究データやソフトウェアを含めた研究成果全体の共有・再利用を前提として，学術情報流通のあり方そのものが変化しつつあることを感じました．

会場には，さまざまな学術団体の関係者が参加していましたが，全体としては，日本食品工学会と同程度，あるいはそれよりやや大きい程度の，小規模学会の参加者が多かったように感じました．一方，事例紹介を行っていた学会は，情報処理学会や日本機械学会など，会員数が2～3万人規模の大規模学会であり，本学会とはかなり事情が異なる印象を受けました．

会場での質疑応答や参加者の反応を見ていると，会員数1000人未満の小規模学会では，学術出版や著作権管理について，まだ十分に整備されていないケースも多いようでした．そのような中で，日本食品工学会ではJ-STAGEを利用したオンライン出版やCreative Commonsライセンスによる論文公開など，小規模学会としては比較的早い段階から出版体制の整備が進められてきたことを改めて認識しました．日本食品工学会誌では，これまで歴代編集委員長をはじめとする多くの関係者の皆様により，オンライン出版や著作権管理体制の整備が進められてきました．今後も学術出版を取り巻く環境変化を踏まえつつ，本誌の安定的な刊行と研究成果の発信を継続していきたいと思います．

（東京大学　五月女格）

© 2026 Japan Society for Food Engineering